

「どうでもいいことだが」

私が住む江東区には運河がたくさんある。休日、その川では釣りをしている人を多く見かける。家族連れや年配の人もある。夏から秋にかけては「はぜ」がよく釣れるようだ。だんだんと寒くなってきて、釣り人は減ってきたものの、それでも釣竿を傾けている人がいる。親水公園のように川沿いの道が緑道になっているので、比較的安全に釣りを楽しめる。先日、えっと思う風景を見た。ある年配の女性が釣りをしていた。黄色いバケツには釣果のはぜが数匹入っているようだ。すると、そこにシラサギが飛んできた。そこそこ大きな鳥だ。そのバケツの近くに舞い降り、中を覗き込む。そして、バケツの中からハゼを1匹くわえ、飲み込んだ。その女性は、いかにもペットの動物のように「もっと大きい魚を食べればいいのに」といって、サギを追い払おうとしない。さらに、サギは2匹目を口にする。サギにしてみれば、こんなに餌を簡単に得られることは少ないだろう。釣られた魚にすれば災難で、もう逃げようもない。ちょっと信じられないような風景だった。

話は変わる。先日夕刻、研究会に出かけたとき、ちょっとしたショッピングモールの中を通り抜けた。この季節、クリスマスツリーが飾られている。そこにベビーカーを押した女性と、幼児が話をしながら歩いている。しばらく平行して歩いたので、子どもの声が良く聞こえる。ベビーカーに乗っているのは2、3歳の幼児、そのベビーカーの横を歩いているのは、園服をきているところをみると5歳ぐらいの女の子。ちょうど保育園から家に帰るところだったのだろう。その子がベビーカーを押しているお母さんとみられる女性に、「あっクリスマスツリーだ」と指をさして喜んで話す。そして、「今日はお父さんの誕生日だからおいしいもの買って行こうよ」という。うなづく女性。「ケーキ買って行こうよ」と明るい声がモールの中に響く。微笑ましく感じる。我が家も二人の子がいる。子というには、すでに二十歳を過ぎているのだが。我が家の母と子もこんな会話をしたのだろうか、あの頃を思い出す。もう〇〇年以上が過ぎ去っている。どうでもいいことなのだが、人に話したくなることがある。

11月21日 校長 鈴木 幸雄

◆問題 ある正の整数を11で割ると、商と余りが同じです。また、その数を15で割っても商と余りが同じです。このような数のうち、最も小さいものはいくつですか。